

げ、途中キャベツ、ジャガイモの捨ててあるのを集めてきて、夜ベーチカで炊いて食べるのです。塩味だけの腐った野菜のくずのその味の何とも言えない美味であったのを今でも時々思い出しております。飽食になれた現代の若者には理解されないでしょうが、紛れもない事実です。

昭和二十二年の五月、ハラシヨウラボーターの第一陣として帰国しました。家業の電気店を継ぎ働いておりましたが、帰国後十五年ほどで発病（高血圧）し、十年前廃業しました。

抑留、帰還、心にしみる思い出

愛知県 竹田 嘉明

孫呉におりまして、孫呉で武装解除を受けて、それから一千人単位の大隊が編成されまして、シベリアの方に行ったわけでございます。途中警戒兵は、「東京ヘダモイ、東京ヘダモイ」とこういう話でございましたけれど

も、私は決してそういう甘いものではないと、本当に東京ヘダモイさせるならこんな方向へ、こんなシベリアの方向に引率するはずがないんだと。もし本当にダモイをさせるんだったら、満州からずうっと南に下がって、いわゆる本当に近道を通ったダモイができるはずじゃないかというような感じで、まあまあ連れていかれるまんまに遠くの方角に引率されたわけでございます。途中非常に悲惨な目に遭いましたけれども、私どもは大体無事に事なくアムールを通過して、また東北の方向に向いて行ったわけでございます。

着いたところがライチヒンスク、そこはとりもおさずシベリアの炭坑町であるということはおそらく知っておりますけれども、案の定その町で石炭掘りということになったわけでございますが、とりあえず着いた当初は、十月のちょうど終わりごろでございます、畑にはまだ芋が収穫が終了していなかったものですから、毎日々々芋掘りばかりの作業でございました。特に嫌だとか、苦しいとか、悲惨だなあと思いましたことは、何と申しまでももう十月といえばシベリアは非常に寒う

ございます。そんなとき、雨が降ったり、雪が降ったりすると、着ているものがほとんどずぶぬれという状態でございます。着がえもなく、乾燥する場所もなく、そのまんま一間真四角に四人、与えられた毛布は各人一枚、そういう中でお互いに体をくっつけ合わせながら、お互いとお互いの体温によって濡れた衣服を乾かして、また翌日作業に出ると。こういう非常に惨めな環境がほんとに苦しいございました。

特に食べ物、シベリア抑留者の皆さんがおっしゃっておられますように、非常に少なくて、例えば飯ごうのふたに五分目か六分目ぐらいのおかゆさんにも等しい量をつるつるっと飲み終わると、それで朝食が終わり、夕食が終わり、与えられるパンはほんとにごくわずかでございまして、とても空腹を満たされて満腹を感じるような状態ではございませんでした。そういう中で十一月の初めになって野良作業が完了すると、今度は雪の中、厳寒の中で石炭掘りの作業に出ていかなければならないという状態でした。その石炭掘りもご承知のようにシベリアは露天掘りでございまして、その露天掘り

が非常に寒い中で、特に五トン貨車なんか、いわゆる二人で一組、モッコを担いでの積み込み作業は一通りや二通りの作業でなかったわけです。特に私どもは、労働作業はあんまりしておりませんでしたので、身にこたえたのはほんとに言語に絶すると、こういう厳しい作業でございました。つくづくそのときに思うことは、可能か不可能かという言葉がありますけれども、可能はないんだと。可能か死かと、二者択一だと、ここまで究極の作業をさせられたわけですが、その思いは今でも忘れることはできません。

そんな毎日が続きます中、やがて新しい年が来まして、一月の十五日、私は子供の夢を見ました。どんな夢かと申しますと、ふるさとの日光川で私が妻の手を引き、左手ですっ裸になった子供を抱いて、川上へ川上へと進む夢を見たものであります。そのときに思ったことは、人間死ぬと三途の川と申しますけれども、ああこれが子供の命日だろう、子供の命日じゃないか、そんなことを思ったわけでございます。どこに知る人もなく、頭の中にきちっと覚えさせて、そしてやがて日本に帰った

ときにうちの妻に話しましたら、それは一月の十二日だと申しましたけれども、その一月の十五日と十二日の違いはやっぱり子供の足でも満州からシベリアのお父さんのところまで訪ねてくるのには、やっぱり三日かかったのかなあという感じをしました。そのことは私は今でも忘れることができません。妻や子供と孫呉の駅で別れるときはちょうど空襲の最中でございまして、別れるとき女房に子供だけは頼むぞ、もしものがあつたら日本人の妻としていさぎよく、決心をして……。

そのときはちょうど機銃掃射を受けておる最中でございまして、あちらへこちらへ逃げ回った人々の様子が今思い出されてなりません。

何はともあれ、芋掘り作業にしろ、炭坑作業にしろ、苦しい苦しい毎日の連続でございました。私はそのとき思ったのは、とにかく六千人も七千人もいる収容所の中でロシア語を話せる人が非常に少ないということ、日本人が日本人のためになることは一体何だろうと、そう考えるようになりました。そのとき、私は満州にいたとき、たとえ一月でも二月でもロシア語の勉強をした経験がご

ざいますので、改めてロシア語の勉強をしよう、そして日本人捕虜のために幾らかでもためになるなら勉強してみよう、こんな気になったわけであります。

作業場で毎日ロシア人に接するのですから、新しいことを全部書いて、その書いた言葉を収容所の中に来て、それを繰り返し、勉強する。また次の日に新しい言葉を耳にする。それを書いて、それを収容所の中で勉強する。そんな毎口を続けて、やがて春が来たとき、私は炭坑所の作業からいわゆる電気工場の作業に移ることになりました。

その電気工場とは、ロシア語で言うエネルギーレーニエ、ここは雑役もありましたけれども、技術屋もたくさんその電気工場に通っておったわけでありました。その作業場には、旋盤工、巻線工、仕上げ工、製図工、かじ屋、こういったいろいろの作業がございましたけれども、一生懸命勉強したロシア語をここで生かせるならと思ひまして、そこでまた勉強を重ね重ねて、そしてその作業場でも見込まれまして、日本人のためになるような新しい仕事につくようになりました。その作業場で

は、だががどれだけ一日作業したかを毎日ロシア人の監督に報告する。朝早く行って作業の指示を受ける。そんな毎日でございましたけれども、その作業場にはすばらしいマスケル、ヤキーモフだとかあるいはニカライだとか、機材係のコフトンだとか、そういう人たちがおりまして、どうにか人間らしい感情が持てるようになったわけでございます。

そんな毎日が続く中、若い女の子でナージャだとかポーリヤとかという友達もできました。ナージャとは朝行くと、「ナージャ、ズドラースチェー」とか、また帰るときには「ダズビダーニャ」というあいさつをして、その作業場で割に楽しく暮らせることができました。そうこうしている間にも、半年が過ぎ、七、八か月が過ぎたとき、私はその作業場から他の収容所に転属する話がありましたので、早速その電気工場でのマスケルに話しました。すると、マスケルから電気工場の工場長へ、工場長から収容所長へということで、私は他に転属することが取りやめになり、引き続いて電気工場で、ハバロフスクに転属になるまでそこで楽しく勤めさせていただく

ことができました。

やがてハバロフスクに着いてからは、建設作業、特に住宅の基礎工事を専門にすることになりました。その基礎工事は、幅が六、七十センチ、深さが一メートル二十センチから三十センチの基礎をつくって、そうしてその上に住宅を建てるわけでございますけれども、私たちの仕事はただ基礎工事専門でございます、一つの基礎工事が終わると今度次の基礎工事をまたすることになるわけでございます。ハバロフスクは非常に橋梁の多い町でございまして、この建物から何十センチ下をテンバにすると、あるいはまた変わったところでは、一メートル高いところに建設をするということございましたので、たまたま私はトランヒットの使用を勉強しておりましたので、そのトランヒットを使って測量する。それから土地の大きさ、幅の図を土地の上に引いて、そしてみんなと一緒に検討しながら作業をしたわけでございます。

そんな作業もしばらく続きましたけれども、それからその作業をやめて、私は収容所の中にある民主突撃隊というグループがありまして、そのグループに頼まれて、

そのグループの指揮をとるようになりました。その指揮をとるようになってから、収容所のすぐ向かい側にあるカガノビッチというセンサ工場へ仕事に行くようになりましたが、主に引込線の積みおろし作業に従事したわけでございます。特に民主突撃隊の隊員は若い人ばかりで、ほんと私もびっくりするような、よく働きました。

そんな毎日が続きましたせいもありまして、収容所長のマローゾフの目にとまるようになり、私はじめ私どものグループは割にかわいがっていただけるとような環境になっていったわけでございます。そんな環境の中で、またまカガノビッチの工場ばかりでなくて、他の作業にも出るようになりました。あるときはアムールの堤防場での作業もありましたけれども、真冬の堤防の上の寒さはほんとに身にこたえました。とにかく一分間としてじっと立っておれないんです。身も凍るとはこんな寒さというのかと思うほど寒かった。今でもその寒さを忘れることはできません。とにかくそんな作業の毎日でございました。

やがて冬が過ぎ、夏が来まして、私ども百人ほどの人

が、ハバロフスクから南へ百キロほどのところにコルホーズがありまして、そこへ出向をして、そこで芋掘り作業をするようになりましたが、そのコルホーズも非常に面積が広くて、大変だなあと思いましたけれども、みんなで話し合って、時間外労働は一切しないことにしようということでのぞみました。夏の太陽、五時といえはまだ高こうございます。コルホーズの監督は六時までやれ、六時までやってくれということでしたが、一切私どもは言うことを聞かずに五時で作業を打ち切ったわけでございます。監督は私どもにやれやれと言うけれども、とにかく我々は時間外労働はしないんだと。もしやれよと言うのなら、間もなく収容所長マローゾフが来るからマローゾフに話をしてくれ。マローゾフ所長がやれと言うなら、我々は一時間延長して、六時までの作業をしようじゃないかということで、監督との話は一応決着をつけました。やがて収容所長が来たときに、監督はやっぱりその話を持ち出して収容所長に話しておりましたけれども、収容所長いわく、私は収容所長のお言葉を聞いてまことに感動をいたしました。収容所長はその監督に

「あなたも責任のある立場でそういうことをおっしゃるけれども、私は日本人を政府からお預かりして彼らを守る義務がある。その責任もある。彼らはやがて日本に帰ってから、再びソ連にお客様として迎えるときに必ずくると思う。そんなときがくるんだ。だから悪い印象は余り与えないで私は日本に帰してあげたい」。私はそのとき思いました。私どもが今この捕虜の立場で、日本へ帰ってから再びこのソ連へ来ることがあるだろうか。全く夢のような意見でした。私はそれを聞いてびっくりしました。今ソ連人の中でそんなすばらしい考えを持っている人がいたということに対して、私はほんとに驚きました。

それが実現したのです。一昨年の夏はモスクワ、レニングラードの旅行と、またことしの夏、ハバロフスクを中心にした慰霊団に参加させていただいたことが実現したわけです。全く不思議でございました。特にハバロフスクでは私どもがおりました収容所が、私が昭和二十二年の十月二十七、八日ごろだと思えますけれども、その収容所から帰るときに、収容所長は私に直接言葉をかけ

てくれて、「竹田ちょっとこい」、どこへ連れて行かれるのかと思ったら、衛兵所の入り口に呼び出されまして、その場で収容所長は私に言いました。「竹田、あしたからおまえはもう作業に行かなくてよろしい。もう行くところは風呂と隣のマガジンぐらいいは行きなさい。そして間もなく日本へ帰してやる」。こういうお言葉を聞いたとき、私はほんとにびっくりしました。それは私だけかと聞いたら、ウーンと考えながら、「私のグループは、グループの者は」とお尋ねしたら、正しい返事はありませんでしたけれども、「私のグループも一緒に帰してほしい、三十人全部一緒に帰してほしい」、こういうことをお願いしましたら、頭を縦に振って、「よし、じゃ帰してやろう」、じゃ名簿をとということになりました、一人でも忘れる人があっては申しわけないと思いましたが、もう一度自分の部屋に帰って、そして収容所長に全部名前を書き出したら、「これだけか」ということだったので、その名簿を出して、収容所長と別れて、直ちに日本人の大隊長にその話をしましたら、「いや、その話はまだ全然聞いていない」ということでございましたけれど

も、やがてそのことが実現したわけでございます。それから途中よく覚えておりませんでした、ナホトカに到着して、ナホトカでどのぐらいいりましたでしょうか、興安丸で船に乗って日本に着くのは十一月の二十日ごろだったと思っております。

それから忘れることができませんのは、私がいたハバロフスクの第五収容所の火事でございました。この火事、私が帰った年のクリスマスの夜に火事をやりまして、私どもが四百五十人ぐらいいたでしょうか、その中の百二十一人という人が亡くなったわけでございます。そういう人たちのためにもぜひという願いがあつて、ハバロフスクへの慰霊団の参加に申し込んで、幸いにも連れていっていただいたから私はよかったと、こういうふうに感謝しております。また、そのときの状況を私どもと一緒にありました村井太郎さんという人が、その回想録を書きまして、その本を私もいただきました。実はその中に、私が先ほど申し上げましたように、民主突撃隊の指揮をしておりましたので、そういう関係があつて私の個人の名前が出ておりました。そのときに村井さん

の兄が、寺田ミツオと言って三重県の名張市に見えました。その人は私の名前を発見することができませんでしたけれども、私の先輩の人が竹田嘉明と書いてあるので、これはひょっとしたら同じ中隊におつた竹田じゃないかということで、私のところに問い合わせがあらまして、そうだと返事をしましたら、その本を送っていただいたわけでございますけれども、その回想録は「氷点下四十度の炎」というタイトルで書かれておりましたが、その村井さんから最近手紙をいただいて、十二月四日の読売新聞に、この本をロシアのある大学の先生、新聞によりますとクリシナ教授がこれをひとつハバロフスクの市民に、こういうようなことはほとんど知られていないんだから、これをひとつ新聞だったか週刊誌だったかちょっとよくわかりませんが、それにひとつ連載をしよう、こういうことになったという新聞を私はいいただきました。

いわゆるグラスノスチが進んでおりますハバロフスク地方でもこういうことがなされるということは、非常にソ連も変わったなあという感じをしております。

私の人生七十二年でございますけれども、この七十三

いただきます。

年の中の二年間のシベリアの捕虜生活だけが頭の中に鮮明に残っておる。いかにシベリアの捕虜生活が苦しかったかということが思い出されるわけでございます。まあ、いろいろな思い出もありますけれども、凍りかかったカボチャの味がカキを食べているような感じになったり、またライチハのヤキーマフのおじいさんが夏にキュウリなんかを持ってきて、「竹田食べよ」と言っていたこと、またヤキーマフの奥さんが作業場に来て、小さなパンをいただけしたこと、これも心にしみる思い出の一つでございます。特に私の頭に残っておりますことは、コルホーズのナチャーニツクの言葉でございます。私はこのマローゾフ、ナチャーニツクのおかげでこうやって人よりも早く帰れることができたんだなあ。二年間で帰った人はほとんどごくわずかでございます。特に村上、石井、向山、中村、それらの人がハバロフスクのお墓に眠り続けているということはまことに無念、ほんとに残念な寂しいことでございます。

まだたくさんありますけれども、この辺で終わらせて